

2010年10月5日

東日本区 1998～2011 ヒストリアン 吉田 明弘

クラブにおける職業分類の意味

2010年7月の区役員会で、「Handbook & Membership Roaster」の会員名簿にある「職業・職種」の欄をなくして、代わりにそれぞれの入会年を記載してはとの発言がありました。理由は、勤務先が記載されているのだから、職業・職種は不要ではないかということでした。

たしかにロースターには、「会社員」、「会社経営」、「自営業」、「建築士」、「食品加工業」、「教師」などと記されています。これは、必須な情報とは思えないかもしれません。

「職業・職種」は、以前は「職業分類」といわれ、クラブにとって重要な事項だったのです。

20世紀初頭にビジネスマンの商売上の情報交換の場として始まった奉仕クラブは、同じ職業のメンバーが、同じクラブに属することを避けてきたのです。

そのことについて、「奉仕クラブ論」で知られ、ロータリアンでもある小堀憲助・中央大学法学部名誉教授は、「奉仕クラブとしてのワイズのあり方」として、次のように述べられています。(1981年8月日本区 EMC シンポジウムの講演。『ワイズ必携』<2001年・西日本区>に掲載)

「親睦の輪に加わる人の資格の一つにワイズにあっては、一業種二会員制がある。これは社会学的な意味において、はっきり認識しておかなければならない。その理論的な根拠は、20世紀における一般的奉仕クラブというものが、地域社会において、一握りの職業人の親睦のエネルギーをもって、他の団体では果たすことの出来ないような社会改良のエネルギーを出すことが期待されているからである。」

「『一握りの職業人』の原理的な解決は、良質の職業人をメンバーにするということである。量的なものをはかるには、数が多い方がいいが、質的なものをはかる場合は、数が多いのがいいとは限らない。」

「自分の業界では体験出来ない次元の高い知的交流によって、新しい発想が生まれ、自他を峻別しない心の絆を大切にした連帯感ともいうべき「ソリダリティー」(連帯)の認識と質的向上をはかっていくことが大切である。」

同業の者がメンバーであれば、仕事上の情報が得やすいという面はありますが、同時に話題が狭い範囲を脱し得ないマイナスがあります。

また、商業上のライバル意識や仕事上の上下関係がクラブにあると、気をおけない付き合いがし難いという問題もあります。本人同士はもとより、周囲も気を使います。

ですから、1業種1名と規定する奉仕クラブもあるわけです。

ワイズメンズクラブも当初は1業種1名、その後、やや緩やかにして2名を原則としてきました。

そのような理由で名簿に記載しているのですから、会社役員とか会社員といった仕事上の地位や経営への参加度、あるいは雇用形態などの分類は、本来的には適当ではありません。

この職業分類は、入会を制限していますが、実際には、同じような業種であっても、細分化して、加わりやすくしています。たとえば大学医学部の教授の場合、教師、医師、研究者などと分けることが出来ますし、内科医、外科医とする便法もあります

日本区時代の古い手引には、職業の記載例が示

されていました。

この30年ほど、このことがあまり言われなくなったのには、次のような理由からです。

企業は多角化によって、本業が何か分からなくなっている。所属部門によって業種が異なってきた。

業種が業態に変わっている。時計は時計店、米は米穀商だけで、販売しなくなってきた。会員資格が広がり、主婦、フリーター、無職の会員が増えている。

名簿作成時にクラブに対する区の指導が行き届かない。

そのような中で、西日本区では定款に「クラブにおける職業分野の会員構成は、同一業種に偏らず、2名以内を原則として、できる限り多くの職業分野にわたるよう努めるものとする」(第3条第5項)という条項があります。京都部では、同業の3人目が入会できないことを積極的に新クラブづくりの動機につなげています。

メンバーの入会年の記載

メンバーの入会年を名簿に掲載することは、会話のきっかけにもなり、面白いと思います。

ただ、ワイズメンは、聖書に「後の者は先に、先の者は後になるべし」という教えがあるためか、チャーターメンバーとか、入会の早い遅いには興味を示さない傾向があります。

第二の職業欄新設の提案

2004 - 2005年度、事業主任から、名簿に第二の職業欄を設ける提案がありました。

提案内容は、これまでの仕事を退いても、有給無給はともかくとして社会的な活動をしているメンバーの職業を記すこと、バイカルチャーというか、仕事以外で取り組んでいることを記すということでした。

理由は、多くのメンバーが意欲的に現役で活躍していることを名簿に表し、情報交換や、交流を深めようというものでした。

この時は、個人情報管理の問題から、なるべく

情報を少なくしようという考えから、役員会提出議案にもならないで見送られました。

上記の提案内容の「は、名簿というよりも「メンバー名鑑」になってしまいますので、ともかくとして、については、すでに記載されている方もいますから、もっと呼びかけてもよいのではと思います。

区会員名簿の移り変わり

会にとって、「会名」、「名簿」、「会則」は、必要な3要素です。

日本のワイズメズクラブで現存する最も古い名簿は、大阪クラブが、1929年に作成したクラブ会員名簿でしょう。ニックネームも記載されています。

区の会員名簿としては、1954年(尾形繁之日本区理事・大阪)版が残っています。クラブ数は25でした。その後は発行が不定期で版型も一定しない時期がありました。

A5型の定着は、1962 - 1963年度(岩越重雄同区理事・大阪)からで、1991 - 1992年度(加藤利榮・同区理事・横浜)まで続きました。

クラブが増えて、ページ数も増えたため、1992 - 1993年度(森田恵三・同区理事・京都ウエスト)から、ワイズメンズクラブの他の書類と同じサイズのA4型に統一されました。

メネット名が記載されたのは、1974 - 1975年度(藤本昇・同区理事・神戸)からでした。

名前にローマ字が添えられたのは1977 - 1978年度(佐藤邦明・同区理事・東京むかで)、住所がローマ字でも表記されるようになったのは、1997 - 1998年度(鈴木健次東日本区理事・東京ひがし)からです。

当初は、名簿だけでしたが、1987 - 1988年度(鈴木功男・日本区理事・東京)から、現在のHandbook部分が大幅に加わりました。

戦後間もない頃の名簿には企業広告が掲載されています。現在のようなクラブ広告が出るようになったのは、1999 - 2000年度(中田靖泰東日本区理事・札幌)からです。この広告収入は、ユ

ース事業に用いる趣旨で続いています。

このように年々、充実してきました。

一方、名簿を毎年発行しなくてもよいのではないかとこの声も根強くあります。前年と変更した部分だけを印刷・配布し、切り貼りするようしたらという案もあります。これは訂正だけなら容易ですが、新規入会、新クラブ設立などがあると、なかなか綺麗には貼り込めず。使い勝手が悪くなります。

1975 1976 年度(片岡健彦日本区理事・東京)は名簿が発行されませんでした。「昨年度に2ヵ年分ということで発行したので、今年度は、区役員リストと訂正分を、無料で会員数分を配布する」と理事通信で伝えてあります。その後、名簿は欠かさず発行されていますから、当時としては、あまり評判は良くなかったのでしょう。

会にとって整備された名簿は不可欠ですが、どのような形にするか、特に年度ごとの変更の少ない Handbook 部分など、工夫の余地があるかもしれせん。

個人情報管理

各種名簿が、本来の目的以外に使われるようになったことから、個人情報管理が厳しくなり、名簿に記載されることを嫌う傾向が強くなってきています。ある学校の卒業生名簿は、必要項目のすべてに原稿を出した人には、無料にして優遇をするといった状況です。

ワイズメンズクラブの名簿は、ダイレクトメールによる営業活動にとって、極めて価値のある情報です。住所・電話番号はもとより、勤務先、パートナー名、年齢まで分かるのですから。

区は、不要になったら不用意に処分しないよう呼びかけています。制作の(株)洛陽宛て送付すれば(送料は本人負担)処分してもらえます。

名簿の加工

「Handbook & Membership Roaster」を加工して、個人で新たな情報を作り出すことが出来ません。たとえば、ワイズメンの平均年齢の算出です。

日本区時代の1990年頃から矢島政美さん(埼玉)が、東日本区になった1997 1998年度以降は、小山正直さん(東京まちだ)が、個人の誕生日から年齢を割り出して、クラブ、部、区の平均年齢の統計を発表されます。残念ながら、女性年齢に未記入部分があり、統計としては全体を表していませんが、経時の変化と傾向は把握することができます。

クラブ名のローマ字表記

クラブ名のローマ字表記は、ヘボン式、訓令式などの違いがありますが、ワイズメンの世界では、国際協会に認証された時の表記が通用します。

この表記に従っていない、部名、クラブ名は、国際投票の時に無効になります。認証状に記載された表記で記します。例：東新部は TOSHIN、仙台クラブは Sendai City、仙台青葉城は Sendai-Aobajyo、御殿場クラブは Gotemba

「Handbook & Membership Roaster」の目次なども来年度から正しておくことが必要です。

あとがき

何年か前に、多分まだメネットだった林理子さん(現横浜つづきメンバー)が、何かの研修会のような場で「きれいなロースターを持っているようではダメ。くしゃくしゃになるまで使い込まなくては。ロースターは、宝の山だから」と言い切られました。さすが、このメネットあつての、あのメンバーだと思ったものです。

たしかに、プリテンの原稿が足りなくて困ったときなどでも、ロースターをひっくりかえしていると、短い原稿なら2、3本、ひねり出せますから、「宝の山」です。

新着の名簿を見るのも楽しみです。プロ野球選手名鑑をめくりながら、ドリームチームを編成するような気分と同じです。

自分の名前が初めて載った時、嬉しく感じたことを思い出します。大相撲の新弟子が番付に初めて小さく自分の名が載った時の喜びが分かりました。